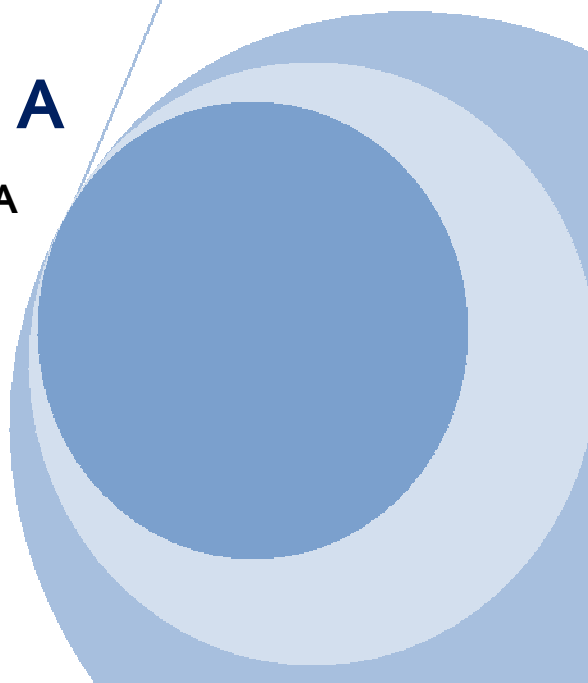


「とれとる」シリーズQ&A

業務用J - M / J - MA , J - K / J - KA

有限会社エポック 「住環境考房館」

2009/10/15



エポラボシリーズ「とれとる」のQ & A

Q 1 : 「とれとる」の成分表は提出できるのか？

A : エポラボシリーズ「とれとる」の成分表の内、公開できるのは界面活性剤についてのみです。

「洗剤」と称する場合、「家庭用品品質表示法」で界面活性剤の種類と含有量を表示しなければならないと義務づけられています。

その他の成分については、表示することは免除されています。

これは、昔、ABS(アルキルベンゼンスルホン酸塩)を使用した洗剤が、河川や湖沼を汚染した事から決まったと聞いておりますが、定かではありません。

また、成分を明らかにすることは企業秘密を漏らす事になり、開発者の権利が侵害されるとの配慮もあるようです。

よって本剤については、主成分としての界面活性剤についてのみお知らせ致します。

Q 2 : 希釈されたものの保存期間は？

A : 保存期間は、長期間の保存により、18L缶が錆びつき内容液材が茶色に変色することがあります。

また、錆による破損も考えられますので、乾燥した冷暗所に保管し、1年以内に使い切るようお願いします。

本剤は水系の為、0℃以下で凍結しますので、寒冷地での保存はご注意ください。

Q 3 : 処理水が下流域の水田に流入しても影響は無いか？

A : 使用実例のM管理事務所での事故例でもお分かりの通り、全くの無害です。

この時使用された「とれとる」の生分解性97%ですので、問題ありません。

但し、この場合は100~200倍まで希釈して使用してください。油紋を消すのにはこの希釈で十分です。

Q 4 : 加水分散効果とは静置した場合と、水が流れている時とではどの様に異なるか？

A : 「加水分解」とは、水を流し続ける事(希釈)で微細化した油同士の距離が離れ、再凝縮しにくくする事です。

静置した状態では、水の流入がありませんので時間経過と共に微細化した油が浮上してしまいます。これに対して、流水による加水分散を行った場合、微細化された油は水が流入し続ける事により、流出する水と共に排出されます。

微細化した油が河川に放出されれば、更に粒子間距離が広がり、再凝縮しにくくなるので、微生物による分解がしやすい状態となります。

Q 5 : 「とるとれ」洗淨剤は乳化剤か？

A : 乳化剤は、石油生成品で水と反応し乳化する事により白濁現象を引き起こしますが、本剤は水系であるため白濁現象はなく、油分を微細化し、分散させる事により処理するもので、「乳化」に対して「分散」という事になります。
乳化剤は石油生成品であるため、舗装や塗装面を傷めますが、本剤は中性水系であるため問題なく使用できます。

Q 6 : 「とれとる」の備蓄について？

A : こんにち、高速道路での事故処理対策として本剤が使用されていますが、各管理事務所での備蓄量に差はあるものの、10～30缶程度の様です。
従来の乳化剤は石油生成品の為、消防法上の備蓄量に限られ、届け出をしなければなりません。本剤は水系ですので備蓄量の制限や、届け出の必要はありません。

Q 7 : 「とれとる」J - Mに硝酸・クローム溶液・第2石油類・水性切削油・苛性ソーダ等は混入してよいか？

A :

硝酸	硝酸の希釈倍率が低い場合は、混ぜた時に僅かに反応熱が出ます。 希釈倍率が高い場合は、殆ど影響はありません。
クローム溶液	J - Mは金属イオンの影響を受けません。 クローム溶液に混ぜても、J - Mの洗淨効果に影響はありません。
第2石油類	第2石油類を混ぜても、洗淨効果に影響はありません。 第3石油類も同様です。
水性切削油	J - Mは、ノルマルヘキサン抽出物質 (n-Hex) について、大きな洗淨効果と油分子の微細化を促進しますので、全く問題はありません。

上記4種については、J - MAも同様にご使用になれます。

苛性ソーダ	苛性ソーダは、水溶液にする際に以下の様な反応熱を出します ・水100 : NaOH 3% 39 (重量比) ・水100 : NaOH 10% 50 (重量比) ・水100 : NaOH 30% 82 (重量比) J - Mに苛性ソーダを溶解する場合は、重量比で3%までとして下さい。それ以上になると、洗剤成分の分離現象が生じます。 J - MAにはアルカリ成分が配合されており、絶対に混ぜないで下さい
-------	--

Q 8 : 廃棄物洗浄後に排出される汚水の処理方法は?・・・「とれとる」J - M使用

A : J - Mを使用しますと、配管や側溝・枳等に油分が付着及び固化することを防ぎますが、静置状態では経時と共に水面に油分が浮上します。

この事から、排水経路中の油分離槽を経由して放流して下さい。

油分離槽での滞留時間が長い場合、浮上油が見られますので、油吸着マットを槽内に浮かせ、浮上油を吸着回収して下さい。

オイルキャッチャーは、油のみを吸着いたします。

また、竹の繊維で出来ているため、一般廃棄物の可燃物として焼却処分が可能です。

油分離槽を通過した排水が、排水処理施設に流入する場合は、その施設の原水水質のキャパシティーを超えないのであれば、生物処理により分解し、沈殿分離層でのキャリーオーバーや曝気槽でのバクテリアに対するショックロード現象も見られません。

なお、調整槽でのオイルボールの発生も激減されます。

「とれとる」J - Mそのものの生分解性が優れていますので、施設や自然界への影響は極小で、J - MAについても同様と言えます。

アルカリ成分も他の排水により希釈されますので、問題はありません。